

特集：朝ごぱん市から見えるまちの景色

— 八木健吾さん —

■このまちに関わるようになったきっかけ

26歳の頃、地元へ帰省したときに「空き家を活用した店がある」と知り、高砂駅近くの店を訪れました。そこで作家さんや落語家さん、匠芸さんと出会い、まちの活動に興味を持つようになったんです。

■朝ごぱん市への参加

商店街の方から「何か一緒にできないか」と声をかけてもらったのが始まりです。ちょうど高砂に入ってきたデザイナーの女性が朝ごぱん市の企画者で、僕も仲が良かったので手伝うようになり、次第に運営にも関わるようになりました。

■印象に残る出来事

最初は商店街の皆さんが後ろ向きで、「何もしてほしくない」という空気がありました。でも、朝ごぱん市を続けるうちに少しずつ前向きに変わっていきました。コロナ禍で出店者が4組しかいない時期もありましたが、それでも続けたことでまた人が戻ってきたのは大きな出来事でした。

■活動が生む価値

人が元気になることが、まちの元気につながると実感しています。日本では自分の意見を言いにくい場面が多いですが、朝ごぱん市のような場では自然と意見が言えるようになる。肩書きではなく“その人自身”が見える場所なんです。

■自身の変化と成長

若い頃は意見を言うのが苦手でしたが、このまちの人たちが受け止めてくれたことで、話すことが怖くなりました。ここでの活動は、僕のコミュニケーションを育ててくれた場所でもあります。

■次の世代への願い

願いは若い人たちが積極的に関わってくれることです。若い人がいるだけで場が明るくなり、希望が生まれる。ここで得た経験を、将来は自分の地元へ還元してくれたら嬉しいですね。